

戦争作品と向き合う

6年 N.S.

私は演劇クラブで戦時中の人々を描いた劇に取り組んだことで、戦争を題材にした作品との向き合い方を考えました。

中学3年生の時、クラブのコーチの提案で、井上ひさしの「父と暮らせば」という戦争の劇を演じることになりました。原爆投下後の広島で生きる若い女性とその父親の二人のみが登場し、父と娘の柔らかな広島弁の掛け合いを中心に、戦争で生き残った人の苦しみや、その苦しみの中で見つけた生きる希望が描かれていました。私は父親役として練習を重ねながら、この父親のような人が当時の広島にもいたのだろうかと思いを馳せました。そして、その時代を生きた人の思いをこの劇に乗せて、観客に伝えることが使命と考えるようになりました。また、コーチがおっしゃっていた言葉で印象に残っているものがあります。「役を演じるということはその役を成仏させてあげること」という言葉です。この言葉を聞いて、私はますますこの父親の思いを届けたいと思いました。

「父と暮らせば」の公演を終えてから、狛江市で行われる平和に関するイベントで、プロの劇団の方と一緒に劇を演じることになりました。戦時中に狛江市で起きた空襲について、昔作られた紙芝居をスクリーンに映しながら発表する朗読劇です。劇団の方は毎年そのイベントで戦争に関する劇を行っているそうで、劇は若い世代に戦争の悲劇を伝えていくのに良い方法だとおっしゃっていました。発表の当日、会場では狛江市の空襲についての展示も行われていました。その一つに、丸焦げになってしまった幼い男子の遺体の写真がありました。会場の一角でその写真を見たとき、戦争の恐ろしさに圧倒されました。私にも同じぐらいの年の弟がいるので悲しみや怒りがわいてきたのです。今まで自分が劇を演じる時に想像していた苦しみをはるかに超えるような経験を戦時下の人々は強いられていたのだと改めて実感し、緊張感をもって劇に取り組みました。

これらの公演を終えてから、二つの気づきを得ました。一つ目は、一人の人として生きている役を演じてから、戦争を自分事として捉えるようになったことです。例えば、ある空襲の死者数を聞いたとき、戦争で失われた命一つ一つにそれぞれ人生の続きがあり、その大切な人生が理不尽に奪われたのだとより意識できるようになりました。二つ目は、戦時下の人々は現代を生きる私たちが計り知れないような苦しみがあると同時に、現代と同じような幸せを感じる瞬間もあったということです。劇中には冗談を言って笑い合うシーンがいくつも描かれていました。今まで私は戦時中の写真やむごい様子の絵を見たとき、戦時下の人々が、悲惨な経験を強いられた、まるで私たちと違う生きもののように思っていました。しかし実際には、これらの劇のように和やかな一時を過ごすなど、現在の私達と何ら変わらない人間であったのです。狛江市の平和イベントで見かけた焼死体となってしまった男子にも、たわいないことで笑う瞬間は絶対にあったのです。その男子の写真を見たときはやっぱり現代の私にはこの苦しみを知らないのだと絶望しました。しかし劇を通して戦時下でも、この男子にも現代と同じような少しの幸せを感じる時もあったのでは

ないかと思いました。そして、戦時下の人々と私たちは同じように生きていた人間なのだと意識したことで、そんな人々の幸せを奪った戦争のむごさがより感じられました。

そして私は演劇などの作品を通して、戦争を語り継いでいくことができるのではないかと考えました。私のような若い世代が役者になったり、観客になったりすることで戦争の恐ろしさや残酷さを、戦争を経験してない世代も自分事として身近に感じるができると思います。

そう考え始めてから、私はある戦争の劇を見たことを思い出しました。その劇には違和感があったのです。その劇では戦時中のある食堂を舞台に、特攻隊の兵士たちの生活が描かれていました。感動的な曲とともに、亡くなった特攻隊員が妹に向けた手紙を読む場面があり、その描写には観客を感動させようとする作り手の意図が色濃く感じられたのです。私はこのようなストーリーが作られることは果たして、戦時中の人々が望んだことなのだろうかと考えました。私が戦中を生きただとしたら、自分たちの人生を奪った戦争が、感動の材料のように使われるのは納得がいきません。一時の感動を演出するために、戦争の悲惨さを美化された気がするからです。これがただの物語なら、このような感動的な死の描き方もよいと思います。しかし実際に起こった戦争を題材にする上で、どこまで作り手の描きたいものを優先するかは課題になってくると思います。そして観客側は私が感じたような違和感を忘れず、何に違和感を感じたのか、作り手は何を意図してこの作品を作ったのか、考えていくべきだと思いました。

そしてこの劇は、戦時中の日本が行っていた特攻隊の美化に通ずる部分があると考えました。戦時中、戦争で死ぬのは美しい死に方とされており、自ら特攻隊を志願した若者もたくさんいました。このような思想はプロパガンダによって国民に浸透しました。プロパガンダとは、ある思想や主義を人々に信じ込ませ、誘導していく宣伝活動です。そしてプロパガンダは国家によって、芸術を用いて行われることがあるのです。戦時中の日本でも国民の戦意を高揚させる絵や映画が作られました。国策落語といって、笑いを交えながら国民の戦争への協力を促した落語もあったそうです。このように芸術が持つ、人の心を大きく動かせるという魅力が、戦時中は国家に悪用されてしまうことがあるのです。私たちが普段娯楽として享受している、漫画やアニメ、ドラマなどが利用されるかもしれません。だからこそ私たちは戦争作品に触れるとき、作り手の意図は何であるのかよく考える必要があります。

戦争を扱う作品は、戦争を体験していない若い世代にも戦争の恐ろしさを伝えられる反面、戦死を美化する表現によって、戦争の捉え方が変わっていくという危険もはらんでいるということが分かりました。このような危険性も理解した上で、役者側であっても観客側であっても慎重に作品と向き合っていきたいです。